様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６２８９２２１

研究課題名（和文）20世紀北朝鮮の建築・都市通史の解明

研究課題名（英文）Overview of Architectural and Urban History of Democratic People's Republic of Korea(DPRK) in 20th Century

研究代表者
谷川　竜一（Tanigawa, Ryuichi）

金沢大学・新学術創成研究機構・助教

研究者番号：１０３９６９１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、学術的空白となっていた朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の建築・都市史に対して、そのアウトラインを解明・構築することができた。特に、建築・都市・土木の包括的観点からアプローチできた上、国際的かつ学際融合的観点から独創的な研究を進めることができた。その結果、建築や都市のみならず北朝鮮社会の多角的理解に向けた学術的基盤を作ることができた。4年間で30件以上の学術論文、研究発表を日本語・英語・コリア語で行ったことが具体的な成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
北朝鮮の都市・建築についてはほとんど知られていなかったなかで、本研究では基礎的な資料を集め、学術的な分析を行なった。それによって、学術的な空白を埋めることができた。また、研究開始からの4年間の間に、東アジア情勢は大きく変化しており、北朝鮮に関する研究も国際的な関心が急激に高まった。そのなかで、本研究は建築・都市研究のみならず、地域研究や経済史、国際政治史などと連携し、東アジアの冷戦史と連結する国際的学際融合研究へと発展させることができた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we tried to clarify and illustrate the outline of the architectural and urban history of North Korea. The comprehensive, international, interdisciplinary and very original approach from the various view points including architecture, city and infrastructure made it possible to further the diverse understanding on the North Korean society as a whole.
The main achievements of this project are over 30 research papers and academic presentations in Japanese, English and Korean languages.

研究分野：建築史・都市史

キーワード：北朝鮮　植民地　社会主義　冷戦　近代化

１．研究開始当初の背景

研究開始当時、日本における朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の建築史・都市史研究は、公的資金を用いた研究の難しさや、不可能に近い現地調査、および一次資料不足のため皆無に等しかった。

元来日本においては､旧東側諸国に対する研究は､その他地域に対する研究に比して少ない。しかしそのなかでもとりわけ北朝鮮に関する研究は不十分であった（旧東側諸国に対する研究が少ないという状況は全体としては今でもあまり変化していない)｡特に北朝鮮は東アジア地域の重要な構成国の一つであり､日本との地理的･歴史的関係も極めて深い｡それを踏まえれば、数年前までは北朝鮮は建築・都市研究の「空白地帯」と言ってもよい状況にあった。もちろん海外における北朝鮮建築・都市研究も、比較的蓄積のある政治・経済系の研究とは対照的に、極めて希薄であった。こうした状況を反映して、一般的な北朝鮮の建築・都市に関する理解として流布していたのは､「北朝鮮の都市は、過度に監視・制御された異質な閉鎖都市である」といった表面的なものであった。そんな認識が前景化するなかで、首都・平壌ですら、同都市の空間形状がいかなるものであり、どのような建物がどこに建ってきたのかということすら、把握されていなかったと言ってよい。

研究代表者はこうした状況を受けて、1）北朝鮮を異端視せず、むしろ世界のいずれの国とも同じように、ひとつの歴史の帰結としてその地域の建築や都市を理解し（バイアスの排除)、その上で 2）北朝鮮の独立後の建築・都市史の流れをつかみ、そのフレームワークを把握・解明することの必要性（建築・都市の通史的解明）を認識し、本研究を立案した。そしてその際、本研究の持つアドバンテージないし独創性として、本研究代表者が北朝鮮の地方都市も含めて 2 度の訪朝経験を持っていたこと（現地訪問経験）や、日本植民地時代からの北朝鮮地域の研究を行ってきていたこと（研究蓄積）があった。それらを活かす形で研究計画を考案した。

世界的に見れば、この数年間で北朝鮮をめぐる研究環境には大きな変化が生じており、当然ながら我々の研究グループだけが研究を進めてきたわけではない。特に韓国における北朝鮮研究の進展は目覚ましく、建築史・都市史に関しては短期間に一気に多くの研究者が参入し、それにしたがって成果も数多く出ている。もちろん英語圏の研究成果も多く出ており、研究が集中するホットスポットとなったと言っても過言ではない｡こうした状況の変化の原因としては、アメリカやドイツなどで冷戦期の研究資料の公開が進み、ようやく研究に追い風が吹き始めたこと、北朝鮮をめぐる国際的緊張や事件が断続的に起こり、否が応でもさらに同国に対する関心が高まったこと、あるいは韓国の政権の交代により韓国と北朝鮮の関係が融和ムードに変化したことなどが挙げられよう。このような学術・社会的変化が同時多発的かつ一気に加速しはじめる中で、本研究はいち早くスタートを切り、研究を展開してきた。

２．研究の目的

本研究は、北朝鮮の近現代建築意匠の変遷と主要都市空間変容の解明を通して、同国・同地域における 20 世紀の都市・建築の通史の解明を主な目的とした。

前述のように学術的に大きな空白地帯と言えた北朝鮮建築・都市研究であるが、その空隙を単純に埋めることを目指したわけではない。その際、1）日本植民地建築・都市研究や東アジア建築・都市史ないし世界建築・都市史との比較や接続を意識すること、2）北朝鮮が 20 世紀半ばに工業地域・工業国であったことに鑑み、建築・都市のみならず都市基盤施設（インフラストラクチャー）まで視野に入れ、建造物史全体の知見の充実を図ること、3）その他歴史学分野や地域研究分野との接続を図り、北朝鮮史そのものに対しても、建築・都市史からの貢献を目指すこともまた意識しており、これら 3 点が本研究のオリジナリティでもあった。

こうした目的をより具体的な形に落とし込むために、以下のような対象設定を行った。

まず、本研究では、平壌、咸興、興南の三都市を扱う。それらは 1945 年以前の朝鮮半島北部において日本人人口が最も多かった上位三都市である。平壌は政治・経済の中心であり、戦後は（臨時も含め）首都となり、1950 年代以降主にソ連の援助を得て発展した。咸興は朝鮮王朝時代から北東地域の中心的な行政都市であり、地方都市一般を議論する上で重要な場所である。興南は 1930 年代以降に巨大化し、朝鮮半島のみならず、日本帝国全体を牽引した日本窒素肥料（株）（以下、日窒）が開発した巨大工業都市であった。この咸興・興南の両都市は、朝鮮戦争以後は東ドイツの援助を受け、世界のモダニズム建築をリードしたバウハウス出身の建築家の指導の下で、新都市計画が進み復興した。

こうした政治・経済都市（平壌)、地方拠点都市（咸興)、工業都市（興南）における建築や都市の歴史を対象としたことで、より目的に即した各課題設定がはっきりすることとなった。つまり平壌を通じて政治・経済的な観点から建築・都市を分析することとし、咸興については地方拠点都市の都市計画史から国際的な視野で研究を行う、そして興南を通してインフラストラクチャーに関する分析を行うこととした。具体的目的をこのように設定し、それらを最終的に総合すれば一定の通史が解明できるようにした。

３．研究の方法

平壌、咸興、興南に対象を絞ったが、資料などの有無の問題から、対象建築もある程度大規模なものとし、メルクマールとなった象徴的な建築はもちろん、宅地開発、アパート建築、大規模水力発電所などに焦点を当てて分析することとした。また研究を進めるなかで、独立以後

の北朝鮮の建築・都市史に関しては、一定の年代を区切って分析を進めていくことが効率的だということになり、朝鮮戦争やその復興（1960 年代まで）、独自の建築・都市の建設とその完成（1970～1980 年代）、大規模な郊外開発（1980 年代後半以降）などに分けて考えるとともに、アパートや象徴的建造物などの建築類型単位でも考察を進めることとした。

研究を進めていく具体的な方法としては、A) 北朝鮮に関する資料調査、B) 旧東側諸国への実地踏査を大きな柱として研究を行ってきた。その際、本研究のオリジナリティとして、上記で述べたような本研究の 3 点のオリジナリティに応じて、1）植民地時代からの連続や東アジアの周辺諸地域との関係性を重視しつつ、2）建築・都市のみならずインフラストラクチャーまでも視野に包括的アプローチを行うこととした。そして 3）建築・都市研究分野に閉ざさずに歴史学諸分野や地域研究などに広く連結しながら進める手法を採ることとした。

その調査の方法として、A) 資料調査へのアプローチから述べる。まず、ドイツやロシアなどに多くの資料があることがわかっていたために、ドイツの連邦文書館やバウハウスの資料館、ロシアの公文書館などで調査を行うこととした。こうした海外資料については、多様な言語や環境に即したアプローチを行う必要があるため、分担・協力研究者として多様なメンバーを揃え、ドイツ現代史研究の川喜田敦子氏やバウハウス研究の冨田英夫氏らとともに共同研究体制を敷いて対応することとした。また日本も実は北朝鮮関連資料が多くある地域であり、特に戦前の資料を研究代表者が中心となって集めるとともに、戦後の北朝鮮のプロパガンダ雑誌や建築関連雑誌なども精力的に収集・分析した。当然ながら韓国にも多くの資料があり、国立中央図書館などに充実した北朝鮮資料が所蔵されていることなどから、くり返し韓国でも調査を行うこととした。

次に B) 旧東側諸国踏査では、朝鮮戦争後の平壌や咸興の戦災復興計画のモデルとなった可能性のある都市を選択し、各都市で主要建築や都市計画資料の収集に加え、建築を実地踏査して建築様式などの特徴を把握することに努めた。

そして、以上のような研究・分析を行いながら、定期的に研究会を開催し、情報共有・発信に努めることとした。また、建築学会主催の国際シンポジウムや、朝鮮史研究会などの当該分野の専門家が広く集まる学会などを通して議論を深めるとともに、その他の分野の学会などにも広く問題提起を行って、成果を共有することを試みた。

４．研究成果

先述したように、対象都市を平壌、咸興、興南に絞り、それぞれにおける代表的建築や都市計画史を、年代毎に考察しながら段階的に解明を進めてきた。そのためここではその枠組にある程度即して述べる。

まず、1953～60 年代初期が、実質的な北朝鮮の戦災復興期であり、現代北朝鮮の建築・都市の基幹構造形成期にあたる。したがってこの時期の分析が北朝鮮の建築・都市の核心と言ってもよく、この点について多くの研究成果を出すことができた。特に同時期は、極めて国際性豊かな都市・建築・土木技術が花開いた時期であったことを解明した。平壌にはスターリン・アンピール様式の象徴的な建築や、当時の東側諸国で確立・進化の途中にあったアパート建築が流入した。これらに関して多くの点を明らかにすることができた。加えて「朝鮮式建物」と呼ばれる北朝鮮のナショナリズムを反映した伝統様式の確立を、具体的な建築家らの名前を挙げつつ日本や韓国との関係の下で解明した。さらに咸興における旧東ドイツの建築家らの関与を、具体的に明らかにすることができた。

また 1960 年代は、住宅の大量供給期であり、平面や材料の特徴、東ドイツ経由で入った近隣住区理論などのその後の展開などを一部明らかにした。そして金日成から金正日体制への移行期にかけて、旧ソ連に影響を受けた建築様式と北朝鮮の伝統様式が、モニュメンタルな建築を通じて確立されていったことを把握した。

1980 年代以降の郊外開発に関しては、平壌西部の光復通りや南部の統一通りが重要であることをつかんだが、信頼できる資料が非常に限られており、これらは今後の課題となった。ただし、金日成による北朝鮮統治の集大成として、1980 年代初期に建設された人民大学習堂を始めとする一連のモニュメンタルな建築群に対しては、情報収集と分析を深めることができた。

そして、非常に重要なことだが、以上のような独立後の北朝鮮の建築・都市史だけではなく、日本植民地時代の建築・都市史に関してもいくつも分析を行い、研究を進めることができた。こうした戦前の理解が不十分であると、独立後の北朝鮮の建築・都市の理解も不十分なものになると考えるに至っている。

以上の点に関して、研究期間を通じて 30 件以上の書籍・論文・発表による成果還元を行ってきた。これらをまとめると、北朝鮮の建築・都市とは、日米による植民地支配や戦争の被害の記憶をテコにして 1950 年代に戦災から再生し、冷戦構造下の旧東側諸国の援助下で国際的な影響を受けつつ骨格を整えていったのであり、世界と切り離された異常で異端なものでは決してなかった。結局のところ、その理解の深度はむしろ私たちの姿勢次第なのであり、植民地支配や冷戦世界を知る全ての人が、北朝鮮の建築・都市史を理解可能であると研究代表者らはいま考えている。

もちろん研究の限界もある。北朝鮮の一般の人々の社会生活に迫るほどの質的な研究に仕上げるには、やはり難しいものがあった。また、複数の角度から検証可能な歴史的資料は、1970 年代以降極端に少なくなるため、建築意匠の国際的な影響関係や北朝鮮国内での活動の様子な

どを明らかにすることは困難であった。これらは北朝鮮との国際関係が変化せねば解決は難しいだろう。我々としてはそうした課題を乗り越えるために、いくつか別の視点からのアプローチに可能性を見出し、本研究を基課題として次の課題へとステップアップしている。次のステージで、より深度ある研究を進めたい。

本研究を通じて研究代表者らは、北朝鮮に関する学術研究を推進し、関係各国に実地調査に赴き、歴史や実情を分析してきた。北朝鮮からの引揚者の方々から大切な史料や情報を頂いたり、北朝鮮やその地域にルーツを持つ様々な人々から話を聞いたり、あるいは国内外の多くの機関に助けてもらいながら、研究を続けてきた。こうした活動が科研費という枠組でなされてきたことの様々な意義を考えるとき、この研究を支援し、協力して下さった全ての関係者のみなさまに、大きな感謝を感じている。その謝意を記しておきたい。本研究は4年という短い期間で進め、その間にできるだけ成果を発表することに努めてきた。しかし研究とは蓄積と熟考がものをいう分野であり、その成果還元は4年にとどまるものではない。その意味で、今後研究代表者らが行う研究の端々に本研究の成果は活かされるであろうし、活かしていかねばならないと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 12 件）
下線は本基盤研究の研究代表者・研究分担者を指す。

【2017 年度以降】
① 谷川竜一「1930 年代の朝鮮半島における水力発電所建設技術と建設体制 ：「帝国の建設協働体」試論」（国際日本文化研究センター主催国際シンポジウム「植民地帝国日本における知と権力」https://nichibun.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7035&item_no=1&page_id=41&block_id=63（査読無））
② 谷川竜一「1930 年代の朝鮮半島における水力発電所建設技術と建設体制―日窒による赴戦江水力発電所建設を通して」（国際日本文化研究センター主催国際シンポジウム「植民地帝国日本における知と権力」報告ペーパー（査読無））
③ 谷川竜一「電気技術者・森田一雄と水力発電―植民地朝鮮の開発前史として―」（日本土木学会『土木史研究講演集 vol.37, 2017』日本土木学会、pp.229～234（査読無））
④ 谷川竜一、戸田譲、今井康博『建築雑誌「特集＝アジア建築家山脈」』vol.132, no.1694（建築学会（特集企画主担当））
⑤ Hideo Tomita,“A Survey of Korean Cities, Settlements, and Houses by East German Architects in the Late 1950s”, UIA 2017 SEOUL PROCEEDINGS, O-0216, pp.1~6（査読有）

【2016 年度】
① 谷川竜一 「북한의 주택경관 형성（北朝鮮の住宅景観の形成）」（同志社大学コリア研究センター・高麗大学校民族文化研究院主催『衣食住文化からみた解放前後の日韓関係（第2回国際学術研究会）』同志社大学報告ペーパー（査読無））
② 谷川竜一 「日英水力による大井川の水力発電計画とアメリカ人土木技術者」（『人間学研究』Vo.15、中部人間学会、pp.55-63（査読有））
③ Hideo Tomita,“Wohnkomplexe in the 1930s USSR and 1950s North Korea by an East German Architect”, Proceedings of 11th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA), pp.2288~2292（査読有）

【2015 年度】
① 谷川竜一「東アジア近代建築史の「空白」に宿る可能性―都市・平壌に刻まれ、紡がれた関係をたどる」（『東アジア近代建築史研究の回顧と展望―『東アジアの近代建築』から 30 年―』日本建築学会、pp.13～14（査読無））
② 谷川竜一「朝鮮戦争からの復興と都市・建築―平壌・咸興の事例から」（『朝鮮史研究会会報』、第 199 号、朝鮮史研究会、pp.11～13（査読無））

【2014 年度】
① 谷川竜一「建築家・金智恒と人民大学習堂」（平田賢一編『百聞不如一見 2010 年～13 年訪朝報告書』私家版、pp.19～24（査読無））
② Hideo Tomita,“A Survey of Korean Settlements by Konrad Püschel, a Graduate of the Bauhaus”,The 13th Docomomo International Conference Seoul 2014, pp.416~419（査読有）

〔学会発表〕（計 17 件）

【2017 年度以降】
① 谷川竜一 「1930 年代の朝鮮半島における水力発電所建設技術と建設体制―日窒による赴戦江水力発電所建設を通して」（国際日本文化研究センター主催国際シンポジウム「植民地帝国日本における知と権力」、10 月）
② 谷川竜一 「公共空間の逆照射―北朝鮮の建築・都市史研究から―」（日本マスコミュニケーション学会 2017 年度春季研究発表会・公開ワークショップ「メディアとしての空間と公共性」新潟大学、6 月）
③ 谷川竜一「電気技術者・森田一雄と水力発電―植民地朝鮮の開発前史として―」（日本土木学会『土木史研究講演集 vol.37，2017』日本土木学会、6 月）

【2016 年度】
① 谷川竜一 「북한의 주택경관 형성（北朝鮮の住宅景観の形成）」（同志社大学コリア研究センター・高麗大学校民族文化研究院主催『衣食住文化からみた解放前後の日韓関係（第 2 回国際学術研究会）』同志社大学、2 月）
② 谷川竜一「1900 年代の中部・大井川開発計画とアメリカ人土木技術者たち―植民地・朝鮮における巨大電源開発の濫觴」（中部人間学会『中部人間学会第 16 回大会』仁愛大学、11 月）
③ 川喜田敦子「東ドイツの戦争賠償とその枠組転換―東側諸国による北朝鮮復興支援への東ドイツの関与をめぐって―」（第 9 回新秩序研究会、明治学院大学、5 月）

【2015 年度】
① 谷川竜一「1920、30 年代の赴戦江水力発電開発の空間的特性とその開発手法・人材の系譜に関して」（「戦時期朝鮮社会の諸相」研究会（代表・水野直樹）、京都大学人文研）
② Ryuichi Tanigawa, "Chemical Industry and Energy Development Japanese development in northern Korean Peninsular in the early 20th century"(International Workshop Complexity of Innovative Colonial Milieu、京都大学人文科学研究所）
③ Ryuichi Tanigawa, "Hydropower Development and Chemical Industrial City “ Hungnam ” " (XXVIIth World Economic History Congress（第 27 回、世界経済史学会）、京都国際会館（査読有、国際学会発表））
④ 川喜田敦子「第二次世界大戦の戦後処理と冷戦秩序の形成―東西ドイツの戦争賠償と枠組転換―」（津田塾大学国際関係研究所研究懇談会、津田塾大学、10 月）

【2014 年度】
① 谷川竜一 「金日成広場の来歴」（日朝学術研究会第 9 回例会、同志社大学（研究発表））
② 谷川竜一「平壌復興と創造された景観」（「朝鮮戦争からの復興と都市・建築―平壌・咸興の事例から―」朝鮮史研究会 2014 年年次大会）
③ 川喜田敦子「北朝鮮復興支援と国際関係」（「朝鮮戦争からの復興と都市・建築―平壌・咸興の事例から―」朝鮮史研究会 2014 年年次大会）
④ 冨田英夫「咸興復興における東ドイツ建築家K．ピュシェルの活動」（「朝鮮戦争からの復興と都市・建築―平壌・咸興の事例から―」朝鮮史研究会 2014 年年次大会）
⑤ 谷川竜一・川喜田敦子・冨田英夫「平壌復興と創造された景観」（「朝鮮戦争からの復興と都市・建築―平壌・咸興の事例から―」朝鮮史研究会 2014 年年次大会）
⑥ Ryuichi Tanigawa, “ Axis, Modernity, and Colonialism ”（Architecture and urbanism in former Spanish colonies in Africa- The creation of a habitat for modernity: a postcolonial definition, Kyoto University（国際研究会発表））
⑦ 谷川竜一「朝鮮市街地計画令と平壌都市計画書」（「戦時期朝鮮社会の諸相」研究会（代表・水野直樹）、京都大学（学術報告））

〔図書〕（計 4 件）

【2017 年度】
① 谷川竜一「朝鮮巨大電源開発の系譜―大井川から赴戦江へ―」（中川理編『近代日本の空間編成史』思文閣出版、pp.369～402（査読無））

【2015 年度】
① 谷川竜一「∡3.75°の近代―旧朝鮮総督府庁舎からみる建築設計の歴史的可能性」（『衝突と変奏のジャスティス』青弓社、pp.114～136（査読無））
② 谷川竜一、原正一郎、林行夫、柳澤雅之編『衝突と変奏のジャスティス』（青弓社（編著））

【2014 年度】
① 谷川竜一「往古への首都建設―平壌の朝鮮式建物」（『記憶と忘却のアジア』青弓社、pp.96～119（査読無））

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：川喜田 敦子
ローマ字氏名：Kawakita Atsuko
所属研究機関名：中央大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80396837

(2)研究協力者
研究協力者氏名：冨田 英夫
ローマ字氏名：Tomita Hideo

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。